

<事例研究 (査読なし)>

ブラジルの戦術についての一考察 — 2011年から2013年優勝への攻撃戦術変遷から —

Tactic Analysis of the Brazilian Women's National Handball Team
: Comparing Attacking Tactics in the 2011 and 2013 World Championship

笹倉 清則¹⁾, 亀井 良和²⁾, 島尻真理子³⁾, 藤岡 映美⁴⁾, 梶川 智礼⁴⁾
Kiyonori SASAKURA, Yoshikazu KAMEI, Mariko SHIMAJIRI,
Emi FUZIOKA, Chihiro KAJIKAWA

Abstract

The present study aims to investigate how the Brazilian women's national handball team, which have been organized for the Rio 2016 Olympics, won the 2013 World Women's Handball Championship. By analyzing the Attacking tactics employed in the 2011 world championship and ones in the 2013, we examine how the team changed and improved the Attacking tactics. As a result, we find that the team adopted two Attacking tactics in the 2011 while five Attacking tactics were employed in the 2013, and that no new tactics were introduced in the 2013. We further reveal that the difference between the two championships lies in the process of implementing the tactics: the team adopted the Attacking tactics in the way that they can improve the defense formation to fully enhance their team tactics as well as individual tactics, and won the 2013 world championship.

Keywords: Analyzing the Tactics, Attacking Tactics, Individual Tactics, Back coat player

I. はじめに

ハンドボール競技が、現在の7人制のハンドボールになってまだ50年に満たない競技である。その短い歴史の中で、戦術は現状まで大きく変化してきたと言える。攻撃戦術では、7人制初期には11人制から継承された戦術であるローリングオフenseから始まり、1980年代のポジション攻撃、そしてシステムチェンジ攻撃、ポジションチェンジ攻撃と変化してきている^{1) 2)} (笹倉ほか, 1997)。先行研究においても攻撃・防禦戦術は、常に互いに対応しながら変化していると言われている^{1) 2)} (笹倉ほか, 1997)。

従って、世界のトップを目指すコーチは、大会での優勝を目標に、次の世界の戦術傾向を把握、そして目標としている大会までの他国の戦術を予測、それに基づきその国独自のゲーム構想を創案し、戦術を決定しトレーニングを実践、そして大会に望んできている³⁾。

過去における成功例としては、1988年にソウルオリンピックで女子金メダル、男子銀メダルを獲得した韓国である。韓国は形態的ハンデを補うために独自のステップワークや、個人技能(シュート、パス)を考案し、それを身につけ、素早いテンポでの独自のハンドボール戦術を構築し、成功を収め、そのスタイルを世界に示した国といえる^{4) 5)} (笹倉他, 1997)。また、近年では2013年女子の世界選手権大会で、十数年前には大会には出場しても、予選リーグ敗退を続けていたブラジルが、次回のリオでのオリンピックを目指し、強化し始め急速に力をつけ頂点に立ったという結果を残している例もある。

現在我が国も、2019年熊本での女子世界選手権大会そして、もう一つのビッグイベントである2020年東京でのオリンピック開催が決定している。その目標に向けての強化がスタートしようとしている今、日本がオリンピックで上位に進出、あるいはそれ以降に世界のトップレベルを維持するための強化を進めるためにどのように今後計画を立て、進んでいくかを明確にしなければならない時期といえる。

そこで本研究では、ブラジルの成功に着目し、近代ハンドボールでは流動的で独自の防禦戦術を用いる国

¹⁾ 日本女子体育大学 (教授)

²⁾ 日本女子体育大学 (講師)

³⁾ 日本女子体育大学 (職員)

⁴⁾ 日本女子体育大学 (助手)

が多い中で、その防禦に対応できる攻撃戦術を用い、防禦を崩し得点を重ね優勝に至ったのかを過去2大会での映像分析より攻撃戦術を明らかにしようとしたものである。それにより、同じ状況にある日本の今後進むべき攻撃戦術の方向性の示唆するための一資料を得ようとしたものである。

II. 研究方法

1. 標本とした試合

本研究では、2011年に開催された女子世界選手権大会と2013年に開催された女子世界選手権大会で行われた試合の中から、この2大会後に販売されたIHF（国際ハンドボール連盟）公式記録DVDから購入できた15試合を分析対象試合とした。

2011年世界選手権大会

ブラジル - 日本
 ブラジル - フランス
 ブラジル - チュニジア
 ブラジル - ルーマニア
 ブラジル - スペイン
 ブラジル - クロアチア
 ブラジル - ロシア
 以上 7試合

2013年女子世界選手権大会

ブラジル - 日本
 ブラジル - 中国
 ブラジル - スロベニア（予選リーグ）
 ブラジル - デンマーク
 ブラジル - オランダ
 ブラジル - ハンガリー
 ブラジル - デンマーク
 ブラジル - スロベニア（決勝トーナメント）
 以上 8試合

2. 分析項目

1) ブラジルの攻撃戦術出現状況と成功率

2大会におけるブラジルの攻撃内容を明らかにするために、対象とした2大会のDVDからパソコンの映像編集ソフトを用いて、映像を取り込みパソコン上で

セットオフense（6：6状況）に限定し、そこで使われた戦術意図のある攻撃を集め、戦術毎に分類し、以下の観点で集計・分析した。それによりそれぞれの大会の傾向と2大会間でのブラジルの戦術の変化を明らかにしようとした。

- ① 2大会で使われた戦術の出現回数とその成功率
- ② 2大会で使われた戦術の出現回数と成功率の比較

2) ブラジルの戦術経過の分析と特徴的傾向

2011年、2013年大会それぞれに於いて、ブラジルがどのような戦術を用い、最終的に攻撃をどこで、どのように終了させているかという経過を明らかにさせる為に、戦術毎に編集した映像から観られる攻撃経過をビデオ再生しながら記述した。それを戦術経過毎に分類することでどの戦術を多く使われていたかを明らかにし、そこからその戦術の特徴並びに戦術意図を見いだすことを目的として分析を行った。また、2大会で新しい戦術や戦術意図が使われているのか、また同じ戦術でも大会によってどのように経過が変化・発展しているかを、2大会の戦術の比較により明らかにしようとしたものである。

3) 個人のパフォーマンス分析

2013年大会優勝には、戦術も大きな要因であるが、戦術同様に選手個々の得点力の向上も必要な要素である。そこで本研究では個々の選手がどのように得点力が変化したかを明らかにするために、ブラジル選手の2大会ともに参加した選手で、かつゲームに主力として出場した選手に限定し、IHF公式記録からそれぞれの選手の得点内容を集計し、2011年の記録と比較することで個々の選手の変化を明らかにしようとした。

III. 結果と考察

考察を進めるにあたり、本論文にける攻撃のポジション表記については図1の表記を以後使用する。また、各戦術名称に関しては現在一般的に多くのチームに用いられている下記の戦術に分類し、本研究で用いる戦術名称を以下のように決定し、今後その名称を使用し論を進めた。

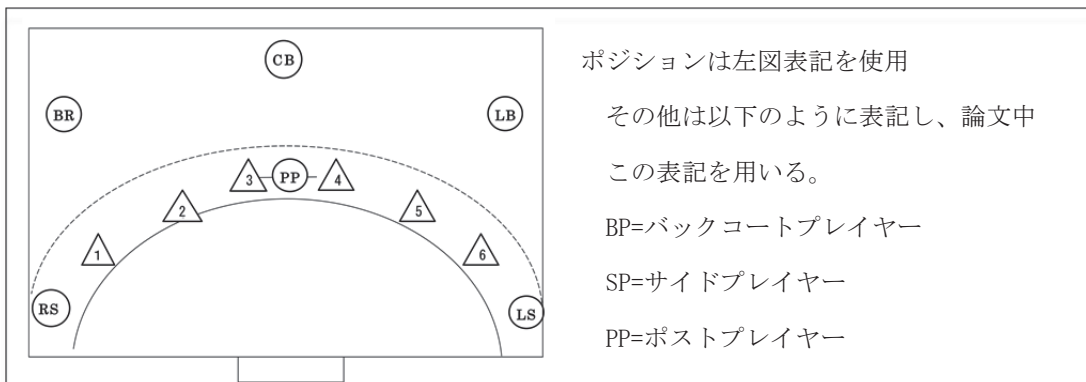


図1 (Figure 1) 攻撃ポジション表記

世界で一般的な攻撃戦術分類

- 中央ポジションチェンジからの展開（以後中央ポジションチェンジ攻撃と表記）
コート中央で、二人のBPによる（例えばCBとLB）のボールを持って、あるいはボールなしでのクロスによるポジションチェンジをきっかけとして攻撃する戦術。
- LB (RB) と LS (RS) 間のクロスからの展開（以後45サイドクロスと表記）
ボール保持したLB (RB) と LS (RS) のクロスをコート片側で行うきっかけから、そのままポストへ走り込む戦術と、クロスの中に逆のRB (LB) もしくは、BR (LB) がポストプレイヤーとして走り込む戦術。
- ポスト中継からの展開（以後ポスト中継と表記）
PPが相手中央の防御者4人の前を大きく移動してボールを受け、このコート中央での大きな動きをきっかけとして攻撃する戦術。
- マンツーマン防御に対する攻撃（以後マンツーマンと表記）
相手チームが、特定の攻撃プレイヤーにマンツーマンで防御し、自由にプレイさせない防御に対する攻撃戦術。
- ポジション攻撃からの展開（以後ポジション攻撃と表記）
各ポジションのプレイヤーがポジション移動することなく、自分の前の防御者に対しての攻撃をき

かけとして攻撃する戦術。

- CBとPP間のクロスからの展開（以後CPクロスと表記）
コート中央でのボール保持したCBとPPのクロスをきっかけとして攻撃する戦術
- サイドへのパスの間にBPのポジションチェンジからの展開（以後サイドユーゴ）
BPからSPへのパスの間に、バックコートプレイヤーがボールなしでポジション移動をきっかけに攻撃する戦術。
- 上記戦術以外の戦術による攻撃
- フリースローによる攻撃戦術（以後フリースローと表記）

1. 2大会におけるブラジルの攻撃戦術別頻度と成功率比較

表1は、ブラジルの2011年（7試合）、2013年（8試合）の世界選手権大会において使用した攻撃戦術を映像編集から分類し、その出現回数とその成功率を示したものである。また、図2は比較しやすいように図式したものである。尚、この集計では、明らかに戦術的意図が観られた攻撃のみを集計したものである。

表1ならびに図2から明らかかなように、ブラジルの2大会における攻撃戦術（セットオフENS）に関して分析したところ、2011年にはポジションチェンジ攻撃と45サイドクロス2つの戦術を中心に攻撃を組み立て、その成功率も42%～43%と確率の良い攻撃で

表1 (Table 1) ブラジルの2011年, 2013年大会における攻撃戦術分類

		ポジションチェンジ攻撃	45サイドクロス	ポスト中継	マンツーマン	ポジション攻撃	CPクロス	サイドユーゴ	その他	フリースロー	合計
2011年	成功	20	22	13	12	9	13	6	3	3	101
	不成功	23	20	13	13	14	8	4	10	3	108
	合計	43	42	26	25	23	21	10	13	6	209
	成功率	46.5%	52.4%	50.0%	48.0%	39.1%	61.9%	60.0%	23.1%	50.0%	48.3%
2013年	成功	17	16	23	8	22	21	6	1	1	115
	不成功	27	26	16	2	16	15	10	9	1	122
	合計	44	42	39	10	38	36	16	10	2	237
	成功率	38.6%	38.1%	59.0%	80.0%	57.9%	58.3%	37.5%	10.0%	50.0%	48.5%

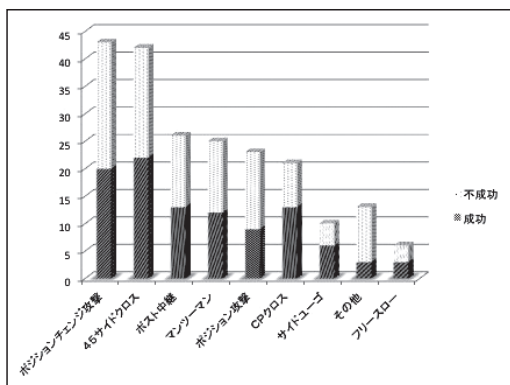


図2 (Figure 2) 2011年戦術別頻度と成功率

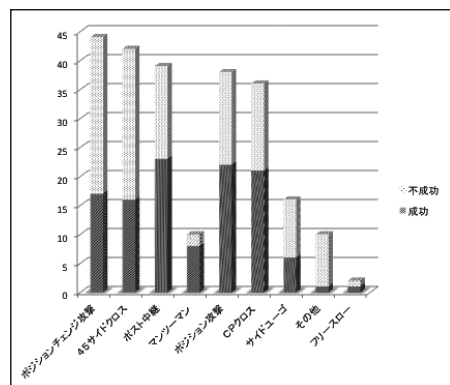


図3 (Figure 3) 2013年戦術別頻度と成功率

あった。また、表1ならびに図3から明らかなように2013年には、前大会で中心として使った2つの戦術は同様に多く使われたが、成功率が2つの戦術とも低くなっている。これは前大会後、各国チームが対応できる防禦に変化してきたことが推測される。この2つの戦術同様に使われたのが、前大会であまり使われていなかった戦術であるポスト中継、ポジション攻撃、CPクロス等の3つである。この3つの戦術はこの大会では60%近いもしくはそれ以上に高い成功率を示しており、新たな主力の戦術であったといえる。従って、2011年は2つの戦術、2013年はそれに3つの戦術を加え、5つの戦術で戦ったことが明らかである。

2. 2大会におけるブラジルの攻撃戦術経過の意図と変化

ブラジルが2大会で使った戦術のうち、2大会共通して多く使われた5つの戦術限定し、それぞれ大会毎に戦術の特徴的な経過を記述し、それを比較することでブラジルの攻撃戦術の変化や相手チーム防禦に対する対応を明らかにしようとしたものである。

1) 中央ポジションチェンジ攻撃

中央ポジションチェンジきっかけによる攻撃の意図は、CBからLB (RB) と防禦の2枚目と3枚目の間で (ボールあり・なし) ポジションチェンジを行い、防禦間を広げた中央のスペースに、BPが大きくコート中央に走り込む戦術である。

2011年ブラジルはこの戦術を、セット総攻撃回数の約21% (43回/209回) 使っており、攻撃成功率

は46.5%で、一番多く使った攻撃で成功率も高く大変有効な戦術であった。それが2013年ではセット総攻撃回数の約19% (44回/237回) と低下した、また成功率も38.6%と低下しており、前大会より有効でなくなった攻撃と言える。しかし、2大会共通してブラジルでは試合中一番多く使われていた主力の戦術である。(表1)

① 2011年大会における戦術経過の特徴

2011年の大会ではブラジルは、CBとLBのクロスから始まる左展開 (図4上) を多用する傾向が観られた。このポジションチェンジからの攻撃経過の特徴として、移動してきたLBによるコート中央でのロングシュートや1:1の突破 (図4①) が最も多く観られた。次に多く観られた経過としては、走り込んできたLBとPPによる中央での2:2 (図4②)、そしてその継続からRRへのずらし攻撃 (図4③) である。また同様に、中央に走り込んできたLBとRBによる中央でのクロス後のRBによるロングシューターとPP間での2:2 (図4④)、そして継続からのずらし攻撃も特徴的な経過として観察された (図4⑤)。

② 2013年大会における戦術経過の特徴

2013年の大会ではブラジルは、前大会とは逆にCRとRBによるクロスからの右展開 (図5上) からの中央ポジションチェンジが多く観られた。その中で、特にCBとRBポジションチェンジ後、PPとの2:2 (図5①)、そしてそこからの継続として逆コートでの広いスペースを使ってのLBによる1:1 (図5②)、または中央1:1からのずらし (図5③) の3

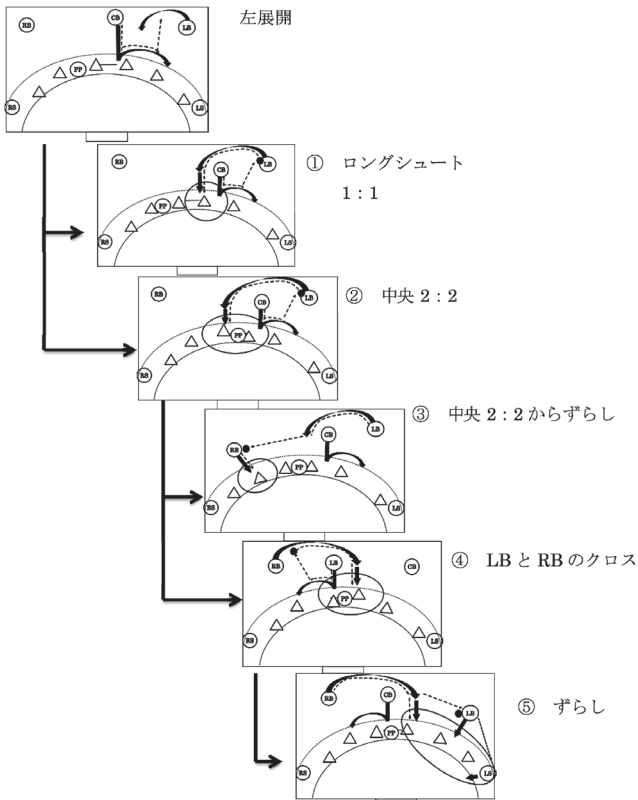


図4(Figure 4) 2011年中央ポジションチェンジ戦術経過図

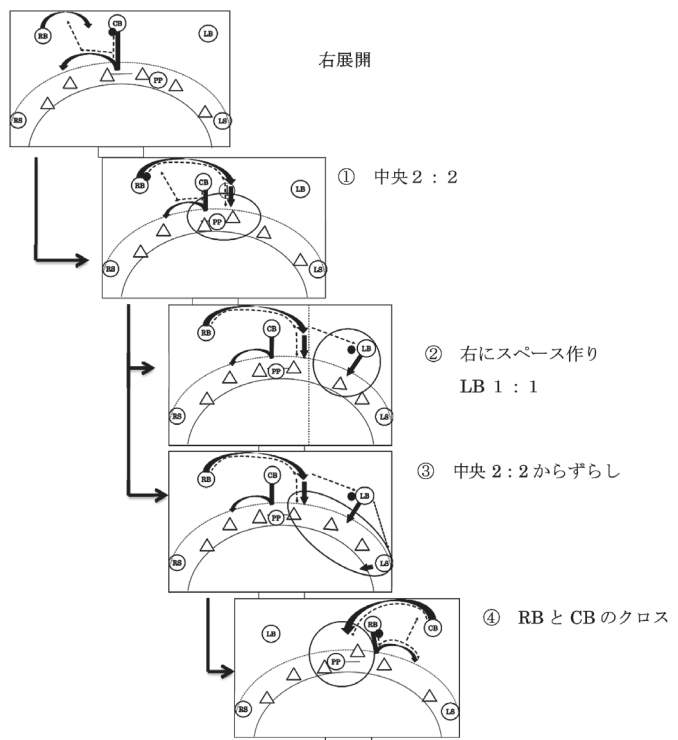


図5 (Figure 5) 2013年中央ポジションチェンジ経過図

つの経過が特徴的に観られた。またもう一つの傾向としてRBとLBによるコート中央でのクロスからのPPとの2:2もこの大会の新たな戦術経過として観察された(図5④)。

③ 中央ポジションチェンジ攻撃の変化

この戦術は、2大会とも最も多く使われた戦術である。しかし、攻撃成功率で2011年より2013年は低下しているがブラジルにとって攻撃の基本戦術として安定した得点を得ることのできる戦術と言える。

2大会での変化は、2011年にはコート左からの開始が多く観られたが、2013年には逆の右からの開始が中心となったことである。この攻撃での安定した得点を左右するのがLBのポジションの選手の個人戦術(シュート, 1:1)と、判断に頼るものが多い戦術と言える。映像からは、ブラジルはこのLBのポジションに15番, 17番, 18番の三人を起用し、それぞれの得意な個人戦術を生かし選手起用が戦術のバリエーションとなっている(表2)。従って、この戦術は、LBのポジションの選手の高い個人戦術を生かすために中央に大きな空間を作る戦術的意図と判断することができる。

2) サイドクロス戦術

BPとSPボールありポジションチェンジきっかけによる攻撃は、BPとSPが、コートのサイドライン付近でボールありのポジションチェンジ(クロス)を行ない、そこから攻撃を開始する戦術である。

ブラジルのこの戦術は、2011年、2013年ともにこのきっかけから2つの異なった攻撃経過が観られた。BPとSPがボールありでポジションチェンジを行った

後、SPがボールなしで、逆側に移動する展開(図8上段 以後サイドカットインと記す)と、逆側のBPがポジションチェンジを行った側にボールなしで移動する展開(図8 2段目 以後逆BPカットインと記す)である。

2011年にはこの戦術は分析したセット攻撃総数の20.0%(42回/209回)、成功率52.4%であり、この大会では2番目に多くつかわれた有効なきっかけである。それが、2013年には18.0%(42回/237回)と減少し、攻撃成功率も38.1%と前大会より低下している。これは、中央ポジションチェンジ戦術同様に前大会より他チームに対応されるようになってきた戦術とも言える。しかし、この大会でも戦術別では2番目に多く使われている(表1)。

① 2011年大会における戦術経過の特徴

i) サイドカットイン展開

2011年大会の45・サイドクロス戦術からSPが逆サイドへ走り込む展開は、図6に示すように、LBとLSのポジションチェンジからが多く観察された。ポジションチェンジ後LSはCBにパスし、コート逆側に大きく走り込んでいる(図6①)。ボールを受けたCBは中央から走り込み、サイドライン際にいたLBとクロスする。LBはボールを受け、シュートや1:1の突破(図6②)、または、PPと2:2を狙う攻撃がこの戦術で特徴的に観られた経過である。この継続としてLBとPPの2:2からずらしで逆側でのシュートも観察されたが出現する回数は非常に少なかった。

ii) BPカットイン展開

この展開は、2011年大会のLPとLSボールあ

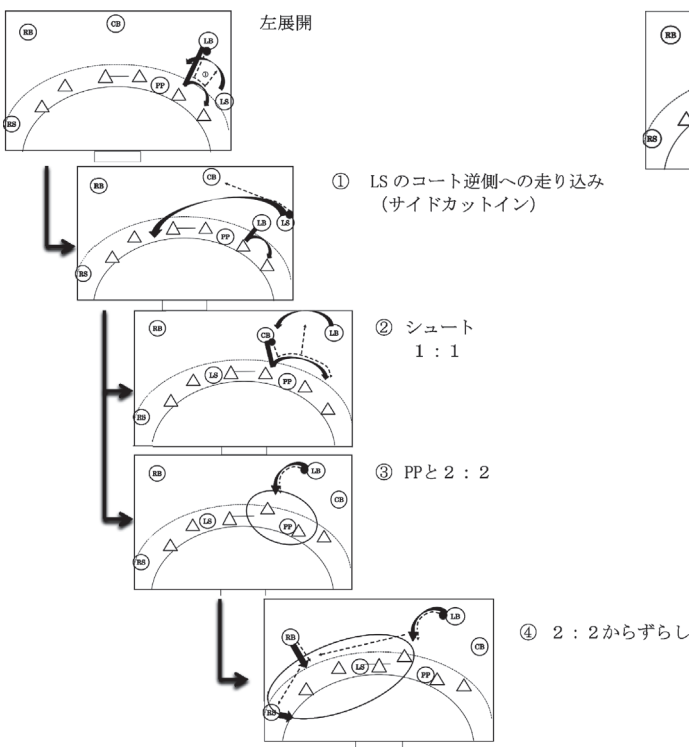


図6 (Figure 6) 2011年45・サイドクロス戦術経過図

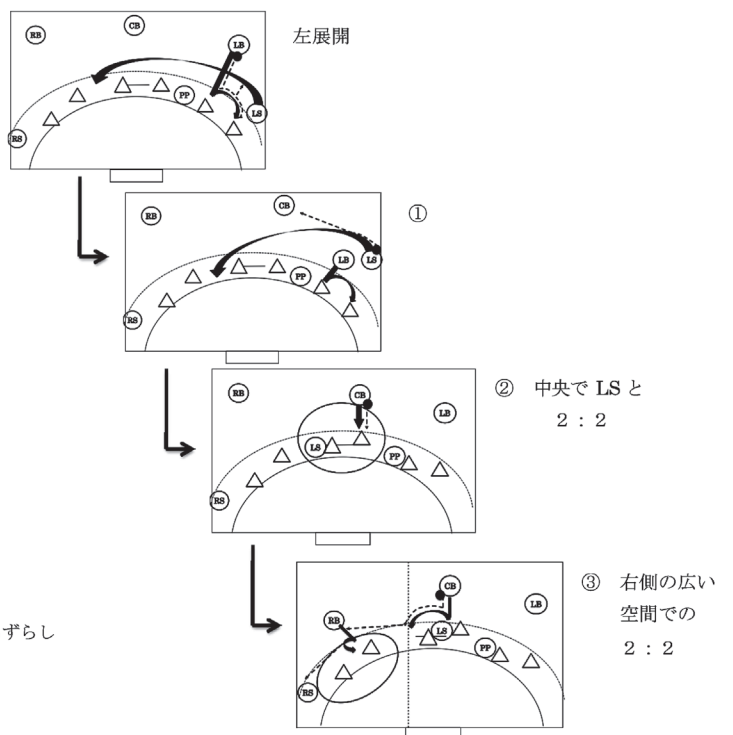


図7 (Figure 7) 2013年45 サイドクロス戦術経過図

りのポジションチェンジの間に、RBがボール側ポストへ走り込む展開が多く観察された(図8 2 段目)。ポジションチェンジしたLSのCBへのパスの間にRBがPPのポジションに走り込み、CBからLBへ素早いパスをする。素早いパスによる相手防御のマークミスをおこし、LBのシュート、1:1の突破(図8①)、その継続としてのサイドへのずれが特徴的な経過として観られた(図8 ②)。また、走り込んできたRBとの2:2での攻撃も観察された。また、攻撃の回数としては多く出現しなかったが、LBとRBの2:2(図8③)を狙うことにより、ボールのない側に広い空間が生まれLBからのパスでRBのポジションにいるCBの1:1の突破も有効な攻撃であり特徴的に観察された経過であった(図8④)。

② 2013年大会における戦術経過の特徴

i) サイドカットイン展開

2013年大会の45・サイドクロス戦術からSPが逆サイドへ走り込む展開は、図7に示すように前大会同様に、LBとLSのポジションチェンジから多く観察された。ポジションチェンジ後LSはCBにパスし、逆側に大きく走り込んでいる(図7①)。ボールを受けたCBは、走り込んできたLSとコート中央で2:2をねらう攻撃が特徴的な経過として観られた(図7②)。この中央の2:2か

らの継続として左右へのずれし、または広い空間で2:2の状況になっているRBの1:1の突破(図7③) 攻撃も観察された。

ii) BPカットイン展開

この展開では、前大会同様の戦術経過が観られ大きな変化は見られなかった(図8)。

③ 45・サイドクロス戦術変化

この戦術は、2大会ともポジションチェンジ戦術に次いで多く使われた戦術である。攻撃成功率では2011年より2013年の攻撃成功率は低下しているが、この戦術もブラジルにとって攻撃の基礎戦術として安定した得点を得ることのできる戦術と言える。この戦術には、二つの異なった経過が観察された。2011年、2013年大会ともにサイドカットイン展開のスタートは、コート左からの開始が特徴として観察された。サイドカットインの経過として2011年は、LSのコート逆側に走り込んだ後に、CBとLBのクロス、そこからのLBの個人戦術やPPとのグループ戦術中心であった。この時、ブラジルはLBには15番と18番の2人の選手を起用しており、15番の選手はPPとのコンビプレイ、18番の選手は1:1が得意な選手でそれぞれの起用をすることが攻撃のバリエーションとなっていた(表2)。2013年のサイドカットインの展開は、LSが走り込んだ中央でCBとの2:2が最も多く観察され、それからの継

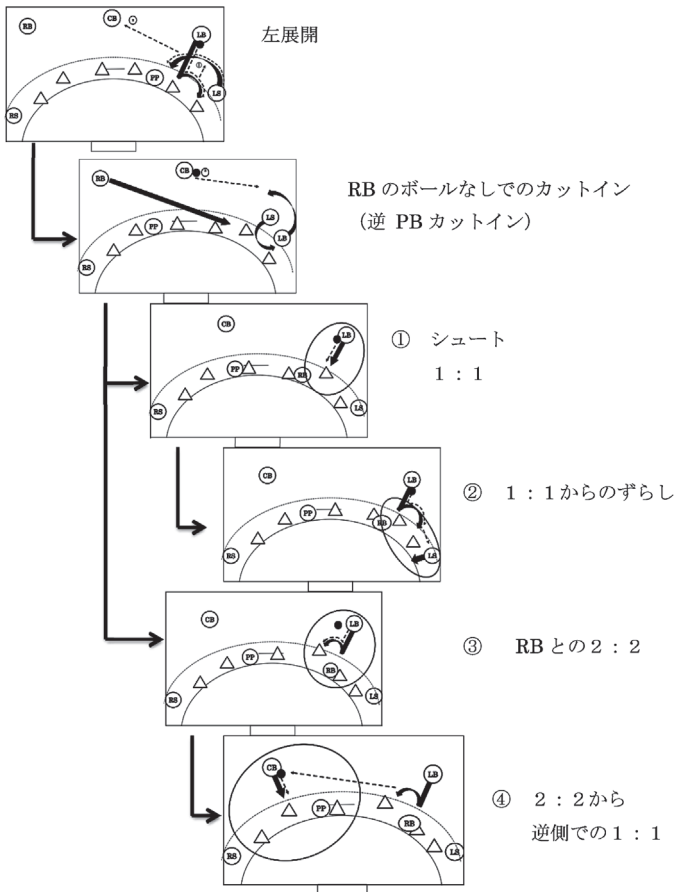


図8 (Figure 8) 45・サイドクロス逆BP 走り経過図

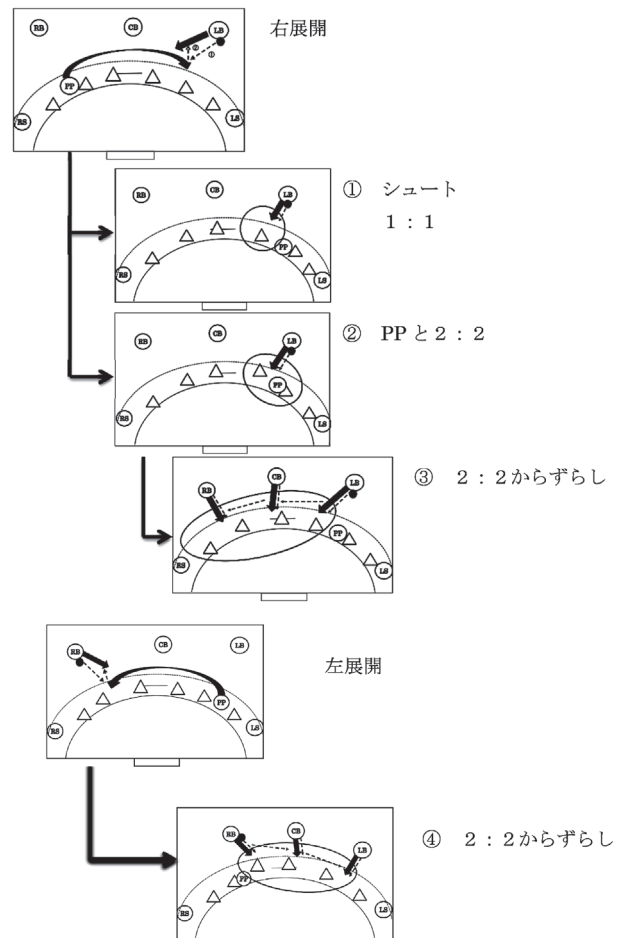


図9 (Figure 9) 2011年ポスト中継経過図

続も有効な攻撃であった。これは2011年と大きく変わった経過であった。

もう一つの展開、逆のRBの走り込みによる展開は2大会で経過に大きな変化は観られなかった。この展開は、逆のRBのボールサイドで防御している選手の視野外からの走りのためマークミスが起こりやすく個人戦術を生かすスペースを作りやすい戦術と判断される。

この戦術の意図は、ブラジルの個人技高い選手を生かし得点を目指すために、防御を左右に振ること、そして左右に防御を分断することをねらいとしているものと判断される。

3) ポスト中継戦術

PPが相手中央の防御者4人の前を大きく移動してボールを受け、このコート中央での大きな動きからBPと2:2から始める戦術である。

2011年ではセット総攻撃回数の約12% (26回/209回) であり、攻撃成功率は50%と高いものであった。戦術としては3番目に多く使われた戦術である。2013年には約16% (39回/237回) で前大会同様に3番目に使われた戦術だが、前大会より多く使われるようになり、攻撃成功率も59%と高くなっている。

① 2011年大会における戦術経過の特徴

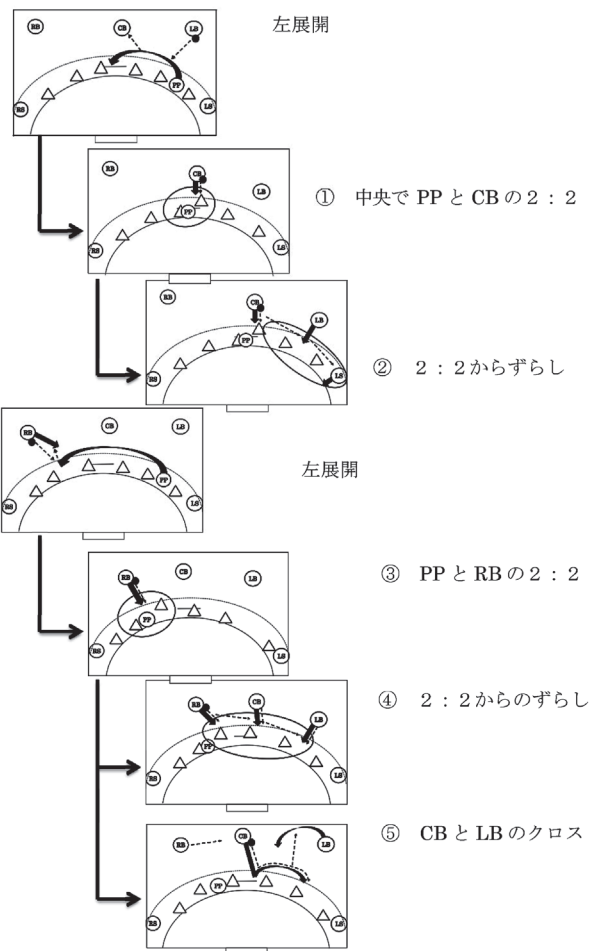


図10 (Figure 10) 2013年ポスト中継経過図

2011年、ブラジルのポスト中継戦術では、コート右から左へ移動してきたPP (図9上) を利用してBPがシュートや1:1での突破 (図9①) を狙う攻撃やPPとの2:2 (図9②) を狙うことがこの戦術の特徴的経過として観られた。また、そこからのずらしの展開も観察された (図9③)。

次に、使用した攻撃回数は少ないが、コート左から右へのポスト中継戦術 (図9左展開) では、走り込んできたPPとRBの2:2を利用しずれをつくり、CBやLBのカットインによる経過が特徴的に観られた (図9④)。

② 2013年大会における戦術経過の特徴

2013年のポスト中継では、2つの特徴的な経過が観察された。一つ目は、走り込んできたPPがCBにパスをし、コート中央でCBとPPでの2:2 (図10①)、その継続としての左へのずらし攻撃 (図10②) が多く観られた。二つ目は、2011年には少なかったPPのコート右からのスタートが増え、RBが2:2の攻撃、あるいは継続してのずらし攻撃の経過が特徴的に観察された。また、新たな経過としてRBとPPの2:2からCBとLBでのクロスが攻撃数としては少ないが有効な攻撃であった。

③ ポスト中継戦術変化

この戦術は、2011年大会ではPPがコート左から

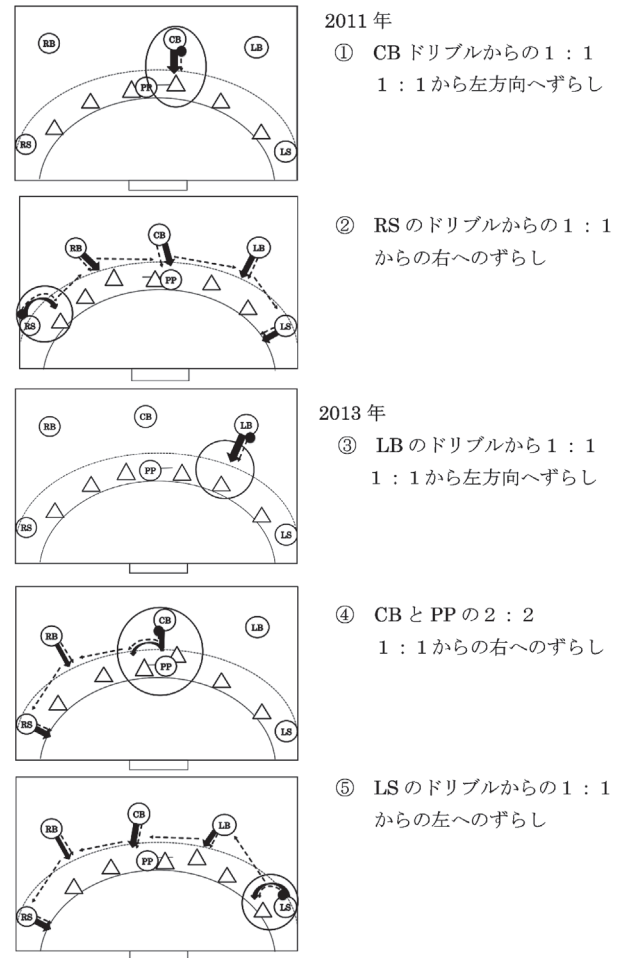


図11 (Figure 11) ポジション攻撃経過図

右展開し、LBの個人戦術、PPとのグループ戦術での攻撃、そしてそこからの継続したずらし攻撃が特徴的な戦術経過として観られた。また、攻撃回数としてはとしては少なかったが、逆の展開では、RBの個人戦術、PPとの2:2は観られず、ずらし攻撃だけが観られた。2013年大会ではコート右から左に展開する経過が多く見られた。経過の大きな変化としては、前大会ではPPはRBまで移動し、RBとの2:2攻撃からの継続という経過であったが、今大会ではPPはCBにパスし、コート中央でのCBとの2:2攻撃、そしてその継続という経過になっていた。

また、前大会同様のRBとの2:2攻撃からの継続の経過も観られたが、これもRBからCBへのパスの後、ずらしではなくCBとLBのクロス攻撃に経過が変化していた。これは、2011年ではこの戦術は、LBとRBの個人戦術、PPとのグループ戦術を中心に考えられた戦術経過に、新たにCBを攻撃の中心とした戦術経過を加え、バリエーションが増え、これが前大会の攻撃回数より2013年に攻撃回数が増え、この戦術をブラジルの中心的な攻撃戦術に変化させたと判断できる。

4) ポジション攻撃戦術

ポジション攻撃は1980年代に主流となった攻撃戦術で、各ポジションの選手がポジションを移動することなく、そのポジションの防御者に対して個人戦術を使つての攻撃戦術である。これは、速攻からセットオフenseに切り換える際、防禦側に油断があると判断したとき、または一旦プレイが中断したあとに不意に攻撃を仕掛ける時に観られた攻撃である。

この戦術は、2011年ではセット総攻撃回数の約11% (23回 / 209回) であり、攻撃成功率は39.1%であった。戦術としては4番目に多く使われた戦術である。2013年には約16% (38回 / 237回) で前大会同様に4番目に使われた戦術だが、前大会より多く使われるようになり、攻撃成功率も57.9%と高くなっている。

① 2011年大会における戦術経過の特徴

2011年のポジション攻撃では、2つの特徴的な経過が観られた。1つめは突破力のあるLB、CBがドリブルから防禦との間合いをとりカットインから突破 (図11①)、もしくはそこから継続してずらし攻撃となる経過である。この経過では、CB、LBが右利きのためコート左側にずれる経過が多く観られた。もう一つの経過は左効きのRSのドリブルからの1:1からのコート右方向へのずらし (図11②) も特徴的な経過として観られた。

② 2013年大会における戦術経過の特徴

2013年のポジション攻撃では、LBのドリブルからの1:1 (図11③) が多く観られた。また、CBとPPによるコート中央での2:2攻撃での突破やポストプレイ、そして2:2からの左側へのずらし (図11④) が特徴的な経過として観られた。また、

前大会とは異なりLSのドリブルからの右へのずらし攻撃 (図11⑤) も、この大会の特徴的な経過として観られた。

③ ポジション攻撃戦術変化

ポジション攻撃は、速攻からセットオフenseの切り替え、セットオフenseが一度中断された後に新たな攻撃の組み立て局面を作らずに、攻撃を継続する場面で観られる攻撃である。2011年はCBのドリブルからの1:1を起点とした左方向へのずらし攻撃とRSのドリブルからの1:1を起点とした右へのずらし攻撃が多く観られた。2013年には、LBのドリブルからの1:1を起点とした左方向へのずらし攻撃、CBとPPの2:2を起点とした左方向のずらし攻撃、そしてLSのドリブルからの1:1起点の左方向へのずらし攻撃が多く観られた。2013年は起点となる攻撃のバリエーションが多くなり、非常に確立の高い中心の攻撃戦術になったものと判断される。

この戦術は、意図的な戦術というよりは相手防御の対応の遅れや、フリースローで防御との間合いができたときに、相手の隙をついて仕掛ける時、もしくは攻撃が何度も中断され、パッシブプレイの可能性のあるような時に使われる戦術で、最終的に個人の能力が大きく影響する。特にCBやLBの判断で行われる戦術

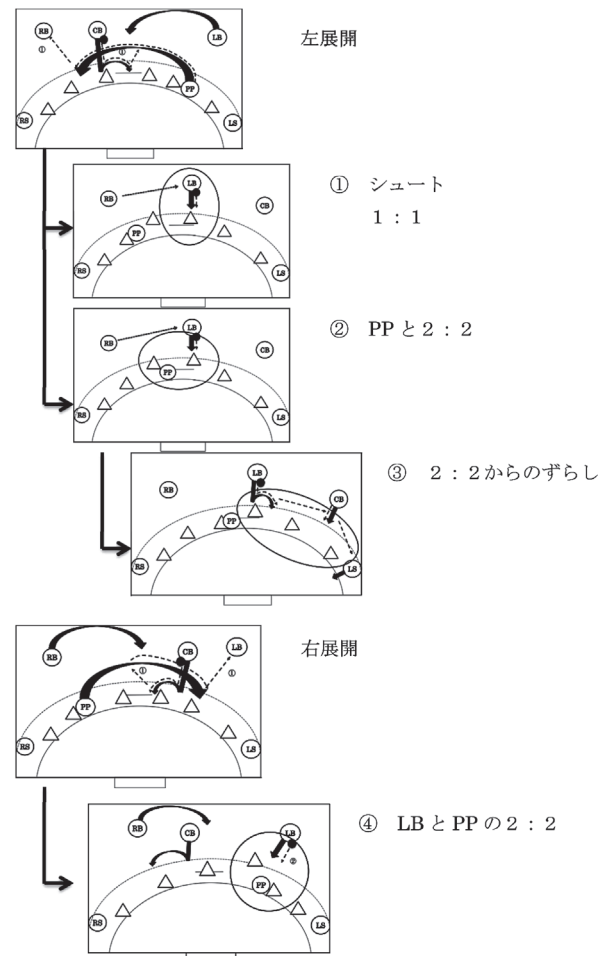


図12 (Figure 12) 2011年CPクロス戦術経過図

と判断される。これは、2013年には各対戦チームがブラジルの攻撃に対応するようになり、攻撃を中断されたり、意図を読まれたりすることが多くなり、最終的にポジション攻撃で終わる攻撃が増えたと考えられる。ブラジルは、それを個人の能力の向上で逆に成功率を上げ、有効な攻撃としたものと考えられる。

5) CPクロス戦術

この戦術は、コート中央でのボール保持したCBとPPのクロスから攻撃を始める戦術である。この戦術は、2011年には分析したセット総攻撃回数の約20% (21回/209回) 使われ、攻撃成功率は61.9%と高く、6番目とあまり多くは使われなかったが、非常に有効な攻撃戦術であった。2013年には15.2% (36回/237回) 使われており、攻撃成功率は58.3%とこの大会でも高く、5番目に多く使われ前大会よりも有効な攻撃の攻撃となり、この大会では他の戦術とほぼ同様な重要な戦術となってきたことがわかる。

① 2011年大会における戦術経過の特徴

2011年大会では、攻撃のスタートであるCBとのクロスでPPがコート右側から走り出す左展開が多く観察された。そしてPPからパスを受けたRBからコート中央に走り込んでくるLBがパスを受け、中央でのシュートや1:1突破 (図12①), そこから継続してのずらしがこの戦術の特徴的な経過として観察された。次に多い経過としては、中央でのPPとの2:2攻撃で、PPのシュート、LBのカットイン (図12②③) で攻撃を終える経過が観察された。また、攻撃回数では少なかったが、逆の右展開では、

左展開とは異なった経過が観られた。CBとPPのクロスの後、PPからボールを受けたLBがPPと2:2攻撃 (図12④) で、カットインやPPのシュートで攻撃をする経過が特徴的に観察された。

② 2013年大会における戦術経過の特徴

2013年大会では、PPの動きは前大会同様に左展開が多く観察された。その後の経過としては前大会ではLBの個人技での攻撃が多く観察されたが、今大会では中央でのLBとPPによる2:2攻撃 (図13①) が多く観察された。またそこからの継続でも変化が観られた。LB中央への走り込みからのPPとの2:2をねらいながら、LBと中央に走り込んできたRBのクロスによる攻撃が新たに観られ経過であった。前大会で有効だったLBとPPの2:2攻撃を生かした戦術経過といえる。また、今大会でも逆の展開は、前回同様に攻撃の回数は少なく、戦術経過は前大会と同様の経過が観察された。

③ CPクロス戦術変化

この戦術は、2011年2013年大会ともに、戦術の展開する方向は左展開が多く観られた。その経過の中で、2011年はLBの個人技 (シュート、カットイン) とPPとのグループ戦術で攻撃する経過が特徴的に観られた。それが2013年にはLBの個人技よりもPPとのグループ戦術が中心となり、またそこから新たなLBとRBとのクロスという経過が特徴的に観られた。この戦術は、他の戦術に比べ比較的短く、早いパスの間にBPの大きな動きからの攻撃、そして中央4人の防御の前にPPやCBが横切るために走り込むLBやRBに対する前へのつめが遅れた状況を作りやすい攻撃である。ブラジルは、この戦術で特にLBの突破力を生かした戦術経過を意図したものと判断される。また、2013年には新たな経過も加え、防御しづらい有効な戦術となりブラジルの中心的な戦術に変化したものと判断される。

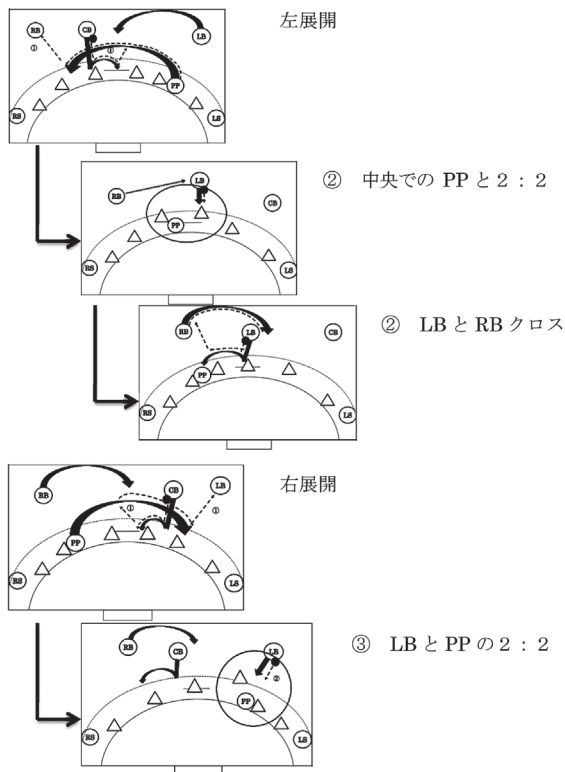


図13 (Figure 13) 2013年CPクロス戦術経過図

3. 個人の試合成果の変化

表2は、2011年、2013年2大会に参加した選手で主力の選手 (全試合出場、出場時間が長いもの) の、2大会でのシュート結果をIHF公式記録から集計し、比較したものである。この表より、各ポジションの主力選手は全員2大会とも参加しておりブラジルが同じチームを維持しながら強化していることがわかる。Wing (サイド), 6m (ミドルシュート) でのシュート数、並びに得点が低下している。逆に9m (ロングシュート) での得点シュート数が大きく増加していることがわかる。9mシュートを個人で観てみると、LBの18番の選手は2011年には総得点9点 (1試合平均1得点)、全体の27%の得点であったが、2013年には23点 (1試合平均2.6点)、全体の38%と増加している。また、CBの9番の選手は、同様に2011年は総得点5点 (1試合平均0.6得点)、全体の15%であったが、2013年には、総得点23点 (1試合平均2.6点)、全体の38%と増加している。この2選手の個人技能 (シュート力) の向上がブラジルの戦術の大きな機動力となっ

表2 (Table 2) 2大会の個人成績

(ポジション)	PLAYERS		試合数	SHOTS								
	番号	名前		総得点/総シュート数	%	6m	Wing	9m	7m	FB	BT	
LS	3	NASCIMENTO Alexandra	2011	9	57/78	73	4/7	19/34		23/26	11/11	
		得点占有率			20%		4%	30%		92%	21%	
LS	3	NASCIMENTO Alexandra	2013	9	54/81	67	3/6	14/25	2/6	23/29	12/15	
		得点占有率			21%		7%	33%	3%	74%	26%	
RS	4	ROCHA Samira	2011	9	18/31	58	2/5	12/19	1/1		3/6	
		得点占有率			6%		2%	19%	3%		6%	
RS	4	ROCHA Samira	2013	9	15/21	71	4/4	7/12			4/5	
		得点占有率			6%		9%	17%			9%	
LS	8	da SILVA Fernanda	2011	8	38/59	64	4/7	22/37			12/15	
		得点占有率			13%		4%	35%			23%	
LS	8	da SILVA Fernanda	2013	8	34/51	67	3/5	17/29	1/2		13/15	
		得点占有率			13%		7%	40%	2%		28%	
PP	2	DINIZ Fabiana	2011	9	11/17	65	9/11				2/6	
		得点占有率			4%		10%				4%	
PP	2	DINIZ Fabiana	2013	9	7/11	64	5/8				2/3	
		得点占有率			3%		11%				4%	
PP	5	PIEDADE Daniela	2011	9	16/26	62	12/21		0/1		3/3	1/1
		得点占有率			5%		13%		0%		6%	4%
PP	5	PIEDADE Daniela	2013	9	14/19	74	13/15	0/1	0/2		1/1	
		得点占有率			6%		30%	0%	0%		2%	
LB	18	AMORIM Eduarda	2011	9	31/55	56	11/17		9/27		1/1	10/10
		得点占有率			11%		12%		27%		2%	40%
LB	18	AMORIM Eduarda	2013	9	34/71	48	1/6	0/1	23/51		2/2	8/11
		得点占有率			13%		2%	0%	38%		4%	28%
CB	9	RODRIGUES Ana Paula	2011	9	27/52	52	15/25		5/14	1/5	2/3	4/5
		得点占有率			9%		16%		15%	4%	4%	16%
CB	9	RODRIGUES Ana Paula	2013	9	39/75	52	3/7	2/4	23/50	4/5	3/4	4/5
		得点占有率			15%		7%	5%	38%	13%	6%	14%
RB (左利き)	22	MOURA Mayara	2011	9	10/15	67	4/7		3/5		1/1	2/2
		得点占有率			3%		4%		9%		2%	8%
RB (左利き)	22	MOURA Mayara	2013	9	11/22	50			5/15		1/1	5/6
		得点占有率			4%				8%		2%	19%
RB	81	CAVALEIRO Deonise	2011	9	23/35	66	10/15	1/1	2/8		7/7	3/4
		得点占有率			8%		11%	2%	6%		13%	12%
RB	81	CAVALEIRO Deonise	2013	9	25/39	64	5/7	1/2	3/9		6/7	10/14
		得点占有率			10%		11%	2%	15%		13%	34%
チーム総合計			2011	9	291/477	61	93/152	63/105	33/94	25/33	52/65	25/28
チーム総合計			2013	9	253/430	59	44/68	42/77	60/151	31/38	47/58	29/38

※ 得点占有率は各ポジションでの個人の得点がポジションの全得点に占める割合

たと判断される。また、ブラジルを支えているもう一つの要因として、RBの右利きの81番の選手と得点は少ないが左利きの11番の選手である。得点力のあり、機動力のあるLB、CBからの左方向へのずらしからカットイン（BT）での得点を二人でチームの50%以上をあげている。

これらのことよりブラジルの2013年の優勝には、特にPBの3人の個人技能の向上と5つの戦術の精度が大きな要因となっているものと判断される。

IV. 結 論

本研究に於いて、ブラジルの戦術の変化について以下のようなことが明らかとなった。

ブラジルは韓国のような、オリジナルな戦術を用いてトレーニングし、戦ったのではなく現在「世界のスタンダード」と呼ばれている戦術を用いていた。

ブラジルは2011年には2つの戦術を中心に攻撃を組み立てていた、2013年には2011年の戦術に3つの戦術を加え攻撃を組み立てたことが明らかとなった。

選手個々の身体能力を生かし、現在世界で一般的な攻撃戦術により「中央に大きなスペースを作る」、「防御を分断し中央にノーマークを作る」という状況を作り出し、その空間を個々の強い突破力と精度の高い縦の1:1を駆使し、突破そしてそこからのずらしを攻撃の柱とし戦術を完成させた。

2大会において、相手防禦の対応に対して、明らかに準備をしており、新たな戦術ではなく同じ戦術でも意図を変化させたり、応用することで効果的な戦術へと変化していた。

また、特にBP選手を育成し、戦術に応じたより効果的な攻撃と変化していた。

参考文献

- 1) 會田 宏 (1994) : ボールゲーム戦術の発達に関する研究スポーツ運動学研究 7 p25-32.
- 2) 笹倉清則 (1997) : 戦術構造の発展史的考察スポーツモルフォロジー研究 3 p100-115.
- 3) シュテラー・コンツアック・デプラー : 唐木國彦監訳 (1993) ボールゲーム指導事典大修館 :
- 4) 財団法人日本ハンドボール協会 (2003) : Tactics of handball in the World.財団法人日本ハンドボール協会 : pp3-53.101 : 119.235-250.
- 5) 土井秀和, 水上 一, 笹倉清則 (1989 vol.6 ~ 1990 vol.11連載) : 「世界に学ぶ攻撃戦術—世界ハンドボール界に吹き込む新しい旋風」: 月刊スポーツイベントハンドボール スポーツイベント社